

事業名

# 「生物多様性を育む森づくり」

実施団体

フィールドソサイエティ

## 取組の内容

昨年度に引き続き、生きものの視点に立った地域の森での活動を念頭に、市民参加による森の手入れや観察会などを3回にわたって開催し、その体験を通して、森林の現況と生物多様性の保全について学び合いました。

### 第1回事業「水場の森づくりー生物多様性を目指して」 2020年12月5日

▶ ビオトープ施工管理士をアドバイザーに招き、水場の森の手入れに取り組みました。

「...森の手入れでは距離感が大切です。環境の多様性が生物多様性を生みます。現場にあるものを有効に使いながら作業しましょう。

ここはゾーニングをして、“生物多様性を学ぶ森”にできると思います...」。

自然な状態を活かして手入れするグループ、遠巻きに観察できる通路を整えるグループに分かれて作業を進めました。

生きものの視点で手入れを行い、観察を続ける場所として「観察の森」の看板も設置しました。



2020年12月5日実施 計13名参加



設置した看板

### 第2回事業「野鳥の眼で見る、森と水」 2021年1月16日

▶ 日本鳥学会会員の専門家を講師に、野鳥にとっての水場について考えました。

「...水浴びは、鳥たちにとって欠かせない日課です。シカの増加によって低層植物が激減し、鳥たちがにげ込める繁みがなくなり、安心して水を浴びたり飲んだりできない状況です。地面から少し高い位置に繁みができると、鳥たちに接近してくる敵が見えてよいでしょう...」。

次回に植えるシキミの植樹地点を子どもたちと野鳥の眼で考え、マンリョウの赤い実の皮をむいて種まきもしました。

そして、アドバイスを受けながら、巣箱を2箇所に設置しました。

作業を終え森を見渡していると、カケスが数羽で移動してきて、タカの鳴きまねをしていました。

地域の森に目を向け続けることの大切さを、野鳥を通して感じ合うことができました。



2021年1月16日実施 計16名参加

手入れを行った第1回事業の参加者からは、「この場所は、定点観察の場所として素晴らしい」、「まずは、楽しむことが大切だと感じた」、「たくさんの人に見てほしいが、反面、人に荒らされない工夫が必要だと思う」、「山の再生に携わり続けたい」などの感想が出されました。

## 第3回事業「水場の植物観察と、植樹」

2021年1月30日

▶ 今年度最後の活動として、植物観察と水場の周囲に野鳥の隠れ処となるシキミの植樹を行いました。

水場までの道筋でも、周辺の植生への理解を深めるべく、ゆっくりと歩き、樹木観察を行いました。

登山道脇にネジキの大木を観察して、水場の森に到着し、地下の水脈と集水域を感じつつ、この辺りに特徴的な植物を観察しました。

扇状地のように広がった下部にはシキミが大きく育ち、その近くには、ナワシログミも見られました。

水場の上には、湿った土地を好むハンノキが見られ、周辺にはヤマコウバシ、ウワミズザクラ、イロハモミジ、クリ、ムクノキなどが育っていました。冬場のため、枝振りがよくわかりました。

そして、植樹です。シキミは、半日陰でもよいのですが、水はけのよい凸地を好みます。前回の選んだ地点は「鳥の眼」、今回はその視点に「樹木の眼」を加え、適した地形、環境を吟味して、植樹地点を定めました。

植樹とは一つひとつの作業過程において植物の気持ちになる体験だということを確認し合い、分散して、5箇所植樹しました。

下山後、感想を出し合って終了、地域の森の植生を観察する大切さを共有することができました。

苗木の生育状況も含めて、常に変化していく山の環境と、そのときどきの課題を見定めて、取り組み続けたいと思います。



樹木観察



2021年1月30日実施  
計10名参加



植樹した苗木

植樹を行った第3回事業の参加者からは、

「自分たちがつくっている、行っているという実感が大切だと思った。植樹苗が育って、野鳥が来てくれるといいと思う」

「実際に森に入ることシカの被害のひどさが実感できた。植樹では、土の層によって色が変わっていくことに気づいた」

「連続して参加することで、徐々によい森に変化していく様子が見えてきた」

「体験することが大切だと思った。防鹿柵の中に育ってきた緑を見ると嬉しい気持ちになる。今日の苗の成長も楽しみ」

「観察をしながら歩くと楽しい。昨年度の単木柵の木の成長を見ることが出来た。様々な人と作業ができることがいいと思う」などの感想が出されました。

## 成果

森の中にある小さな水場周辺での試みですが、3回にわたって、子どもたちから大人まで、広い世代の参加を得ることができました。

崩壊地形の緩斜面で活動することによって、地域の生態系を維持することの大切さと共に、身近な森の景観や森林の災害防止機能についても関心が高まるものとなりました。

## 今後の課題

森と暮らしの距離を縮めるためには、都市近郊林である地域の寺林をどのような観点で管理していき、どのように地域の方々に関心を持っていただけるかを考え続けることが課題となります。

生きものの視点に立った「生物多様性を育む森づくり」は、野生動物とのつきあい方もあわせて、地域における自然共生社会の創出につながる活動です。そのためには、森の状況や環境変化を継続観察し、丁寧に検証を重ねていくとともに、今後も、世代を超えて取り組んでいく必要性を感じます。